

れの間に、現実の対抗関係が具体化されるかという民衆の斗争組織の問題は、まさしく流通過程のあり方によつて制約される。だがこの流通過程のあり方というのは、結局民衆のそれへの参加の仕方、すなわち民衆の生長の程度によつて規定されている。幕末維新の中間地帯の豪農はいわばその歴史的な環をなしているわけである。ただしこれは分析の順序に従つてであつて、表題どおり「展開過程」となるためには、問題を逆に追わねばならぬであらう。

あるいはこれは、歴史家の希望的な読み方であつたかもしれない。いや希望的なのではなく、氏が私たちに遺していつた課題なのであらうと思う。だから歴史家が「展開過程」を完成するためには、どうしても、幕末維新を完成するためには、どうしても、幕末維新の畿内や辺境地帯の分析を、おこたつてはならないのである。

すでに予定の紙面もこえたので、非礼を詫び氏の冥福を祈つて、つたない紹介をおわらう。

—高尾一彦—

Oscar Halecki : The Limits and Divisions of European History.

(London, Sheed & Ward, 1950)

時代区分の仕方にはいろいろあるが、古代・中世・近代(あるいは近世)と分ける、いわゆる三時代区分法は、今日でもひろくほとんど無批判に用いられている最も通俗的便宜的な歴史の区分法である。ある場合には、時代区分をこえた何か動かすことのできない客観的な存在であるかのように、古代的とか、中世的とかのレッテルがはられて、歴史事実が簡単に片づけられてしまう。しかしこのような不動の枠の中に歴史をはめこむことが、果して歴史を、歴史的事実を真に捉らえる道であらうか。

このような歴史の三分法がルネサンス時代のヨーロッパに発生し、十七世紀末から一般に広く用いられるようになったこと、またこの区分法に対する反省や批判が今日試みられつつあることは、知る人もすくなくないが、この問題を真剣に考えている歴史家は、わが国では余り多くないようである。しかし、三

時代区分法に対する反省は、たんに歴史哲学の問題に止まるものではないのであつて、すぐれて歴史家の問題である。というのは、ヨーロッパの歴史を研究している歴史家でありながら、ヨーロッパ史の全体構造については、ほとんど反省することなく、無批判に三区分法の構成に立脚して、いたずらに、些細な事実へのみしがついて、巨視的態度で考察しない結果、ヨーロッパ史を研究しながら、ヨーロッパとは何であるかが分つていない、いなそれを考えもしない歴史家が多い。事実の精緻な研究が、ヨーロッパ史全体の流れの中に位置づけられないとき、歴史研究としては意義をもたないことは、すでにランケの指摘したことである。

三時代区分法の問題は、実にこのヨーロッパ史全体に、さらに広く世界史の構成にもかかわる問題であり、ひいては国史や東洋史などにも関連する重要な問題である。ハレツキのこの書は、その意味で、多少の偏向はあるにせよ、わが国の歴史家たちに極めて興味ある問題を提示していると思われる。

著者ハレツキはポーランド人で、クラカウ

の大学を卒業し、現在ニューヨークにあるフォードham Fordham 大学の教授であり、ポランド史やローマとビザンツとの関係その他に関する多くの著作がある。本書は、思想的にはトインビー、ドーンソン、レイノール Conington de Reinold などの影響が強いが、巻末の註でも分るように、その読書範囲は極めて広く、ことに西欧の歴史家には類をみないほど、東欧やロシア関係の文献が多く引用されている。

ドーンソンの短い序文をもつてはじまる本書は、十章からなっており、第一章の「ヨーロッパ史とは何か」において、いわば著者の基本的立場が提示され、その立場に立脚して、「ヨーロッパ史」の時間的限界（第二・三章）と地理的限界（第四・五章）、ついで地域区分 Geographical divisions（第六・七章）と年代区分（第八・九章）が論ぜられ、最後の章で「ヨーロッパ史の基本問題」が提出されている。以下紙面の許す範囲で、本書の内容を簡単に紹介しよう。

ハレッキはまずヨーロッパ史を、「一つの全体、他のいかなるものとも明瞭に区別され

る一つの共同体として考えられた、すべてのヨーロッパ諸国民の歴史」として規定することから出発し、このようなヨーロッパ史こそ、トインビーのいう「理解可能な研究領域」であることを強調する。さらに注目すべき点は、ヨーロッパを一つの共同体としてのみでなく、一つの時代——今日終りに来ている——としてとらえること、いしかえると、より高次の世界史の中で一つの時代——始と終をもつ——としてヨーロッパ史を位置づけ

るべきことを説く。いま一つ彼が強調する点は、従来のヨーロッパ史はもっぱら西欧の歴史に他ならなかつたが、これまたヨーロッパ史を誤解させるものであり、東欧もまた当然考慮にいれるべきであるとする点である。かくて彼は、ヨーロッパ史を「人間の普遍史の中でヨーロッパ時代 European Age」として定位するとともに、そのような歴史的ヨーロッパの構成要素からして、「小さいが変化にとむ大陸、ギリシア・ローマ文明の遺産をうけつぎ発展させ、キリスト教によつて変形され高められた諸国民の共同体」として、さきの「ヨーロッパ」の定義を補強する。こ

のような立場からすれば、従来の三時代区分法を無批判に受容することができないのは当然であり、これを批判しつつ、彼は第二章において、まず「ヨーロッパ史」の開始の問題をとりあげる。

第二章で著者が論じているのは、四七六年の西ローマ滅亡を転機とする古代・中世区分の問題である。この問題は、わが国においても、多くの歴史家によつて紹介され周知の事実であるが、ハレッキもまた、ロート、ドブシュ、ビレンヌ、トインビー、ドーンソンなどの所説を紹介引用しつつ旧学説を批判し、古代・中世区分の代りに、「地中海時代」・「ヨーロッパ時代」の区分をもつてすべきことを主張し、その交替の時期を大体八世紀から十世紀頃においている。

それでは、「ヨーロッパ時代」の終末は、何時頃か。これが第三章の問題である。二十世紀の今日が「ヨーロッパ時代」でないことは自明であるが、ヨーロッパの解体、ヨーロッパの指導的地位の喪失が始まつたのは、著者によれば、そして、ヨーロッパをキリスト教徒 Christendom と同一視する立場——

これはドーソンと同じであり、著者の基本的立場である——に立つハレッキは、クリスト教的伝統と人文主義的伝統の内的調和が破れ、後者の優位、世俗的文化が支配的となつた時からであり、同時にそれは新しい歴史の時代、大西洋共同体 Atlantic community の時代の開幕をつげるものである。十七世紀から十九世紀までは、いわばこの両時代の推移、過渡期といえる。二十世紀の二つの大戦は、この転換を決定的なものにしたものに他ならない。しかし、この二つの時代、ヨーロッパ時代と大西洋時代との関係は、トインビーのいう affiliation 以上の関係をもつことに注意されねばならない。

このようにハレッキは「ヨーロッパ史」——「ヨーロッパ時代」の時間的限界について論じたのち、次の二つの章で、その空間的限界についての考察を進める。歴史的ヨーロッパの空間的限界が地理的ヨーロッパのそれと一致しないことはいうまでもない。著者はまず歴史的ヨーロッパの北・北西・西・西南・南・東南の諸地域、具体的にはたとえば、スカンディナヴィア諸国、バルト海、アイルラ

ンド、大西洋沿岸諸国、イベリア半島諸国、地中海沿岸、小アジア、トルコ、バルカン、黒海などについて、それがいかにヨーロッパ史と関係してきたかをのべ、それらが大体、今日北大西洋条約諸国、すなわち、大西洋共同体に発展してきていることを指摘している。

しかし著者にとつては、空間的限界の問題は、むしろ東部——Great Eastern Isthmusにあるように思われる。第五章はこの問題、いいかえると、ヨーロッパとロシアとの関係の問題を論じ、ロシア史の解釈に關する諸説を紹介している。

西欧と東欧の関係の問題は、さらに第六章においてやや詳しく考察される。著者が、ここでいわんとするところは、結局ローマ・カトリックとギリシア正教という区別で区別することか妥当でないこと、ロシア史は時期によつてヨーロッパに、或は非ヨーロッパに入れるべきこと、東欧の歴史は、ロシア史プラス諸スラヴ小国の歴史ではなく、むしろ西欧とともにヨーロッパ史を構成していることなどである。ヨーロッパ史の空間的区分につ

いての次の言葉は注目される。「丁度歴史の時間的区分が、個々の事件に基^{デイツ}づいてなしえず、長短の過渡期を考へてなされなければならぬのと同様、空間的区分も、文化的境界が前進したり後退したりする大小の過渡地帯の存在を考慮に入れてなされるべきであり、これが歴史地理の典型的な姿なのである」(一〇九頁)。

このような立場で、著者は、第七章において、中欧の問題、とくにその二重性 dualism について論じている。ここで彼はドイツ人のいう Mitteleuropa の概念を批判しつつ、中欧を、West-Central Europe——ドイツと East-Central Europe の二つに区分すべきことを主張する。そして彼は歴史的ヨーロッパの地域区分としては、大体四つの地域、西欧、中欧の西部と東部、および東欧の四地域とし、それぞれの地域の関係を接触地帯を考慮にいれつつ、歴史的に考察して、これを立証しようとしている。

ヨーロッパ史の空間的区分について述べたのち、ハレッキは次の二章(第八・九章)で、その時代区分を論じ、まずいわゆる中世

とルネサンスとの関係を考察する。この問題はすでに多くの学者によつて論じられた問題であるので、詳しく紹介する必要はないが、ハレッキの意見の特色の一つは、もし強いてこの二つの時期の区分を求めるならば、大体十四世紀末（一三七八年前後）におくのが妥当であることを、諸事実をあげて、とくに東欧に関する史実を引用して主張していることである。それはこの時をもつて、「ヨーロッパ共同体」の分裂をみているからである。

それではいわゆる「近世史」と「現代史」との区分はどうであろうか。前述したようにヨーロッパ史をヨーロッパ時代と考え、現代すでにその終末をみているとする著者にとつては、ヨーロッパ史の「現代史」はありえず、それはむしろ彼のいう、「大西洋時代」に属するものでなければならぬ。従つてこの第九章で考察しているのは、この大西洋時代の開始と展開に他ならない。最後に、自由の問題を論じつつ（第十章）ハレッキはその著を終つてゐる。

以上が本書の簡単な内容である。著者がそ

の主張を立証しようとして引用している具体的な事実をほとんど省略したために、この紹介は極めて力弱いものになつてしまつた感がある。しかし、私が本書を紹介した目的は、前にものべたように、ヨーロッパ史の最も基本的な問題、ヨーロッパ史の時代区分とその構成にある。彼の行つた事実の解釈には簡単に賛成できないものや、ことに東欧の歴史に関する事実については私にはほとんど無知であるために、全面的に彼の主張が正しいと断言することはでき難いにしても、従来のヨーロッパ史、その三時代区分法に対する批判には、充分傾聴すべきものがあるように思われる。

彼の基本的立場、すなわちヨーロッパを本質的にキリスト教的共同体とする見解や、そのロシア史に関する解釈には、賛成できない人も多いであろう。しかし、東欧の歴史をヨーロッパ史の重要構成要素として取上げ、その視点からヨーロッパ史を再構成しようとする彼の意図は、世界史の構成について、多くの問題をもつ今日のわが国の歴史学界に、興味ある示唆をなげるように思われる。というの

は、従来の世界史が、もつぱらヨーロッパ史であつたことを考えるとき、ハレッキが、ヨーロッパ史について行つた再編成を、世界史について、われわれが行いうる可能性と必要性とを強く刺激するものがあるから。

最後にハレッキと全く同じではないが、同様な立場から「ヨーロッパ史」を批判し、極めて教えられるところの多い書物として、ド・ソンの *Understanding Europe* (London, Sheed & Ward, 1952) があり、両書を並読すれば、叙上の問題について教えられるところが多いことを記して、この素雑な紹介を終りたい。（B 6 版、二四二頁、邦貨約五八〇円）

— 前川貞次郎 —

二つの文化變動理論

W. F. Ogburn : *Social Change*, new edition with supplementary chapter, New York, 1950.

B. Malinowski : *The Dynamics of Culture Change*, New Haven, 1945.

一

文化の変化に関する研究は、最近の人類学